追悼

明治聖德記念學會と阪本是丸先生

――「明治の聖代を永遠に記念するに萬古不易の眞理研究を以てせむとして起れる日本學會」をめざして――

明治聖德記念學會事務局

明治聖德記念學會理事長・國學院大學名誉教授 阪本是丸先生は、令和三年四月十八日、七十一歳を一期として逝去された。

先生は、御実父の阪本健一先生（戦前は官社の宮司や地方祭務官、戦後は北野天満宮権宮司や長門一宮住吉神社宮司等を歴任され、傍ら明治神道史研究に先駆的業績を残された）の学究の志を受け継ぎ、近代神道史研究の第一人者として、神道研究を牽引されてきたことは、多くの人が知っている。また神社新報社に、記者・論説主幹として長く関係され、皇室・神社をめぐる時事問題にも、常に目を向けておられた。学界・神社界の損失は、計り知れない。

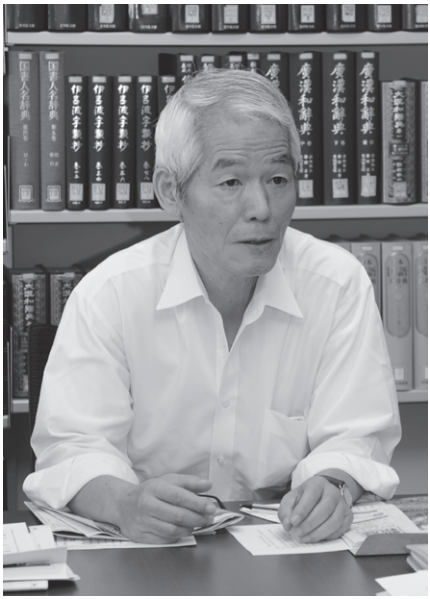
こうした先生の経歴や学問、大学や神社界における功績についての詳細は、多くの方々によって書かれるであろう。本稿は単なる「思い出話」ではなく、簡単ではあるが、先生と本會との関わりを記し、先生を偲ぶ縁としたい。本會としては、むしろそれが筋であろうし、泉下の先生もお許し下さるのではないかと思う。

先生に「明治神宮の創建と聖德記念」という小論がある。『神社新報』平成二年八月二十七日号に掲載されたもので、のちに多少加筆されて、『近代の神社神道』（弘文堂、平成十七年）に収録された。

先生は、昭和天皇の御聖德を記念する事業を推進するに際して、明治神宮の創建とその御聖德記念の諸事業に学ぶべき点が多いという観点から、明治神宮内苑の造営を「国民の明治天皇のご聖德を偲ぶ国民の熱誠の賜物」、また外

苑の造営を「明治天皇のご聖徳を偲ぶ全国民の直接の真心の結晶」と評価しているなかで、「明治天皇のご聖徳を記念する事業としていま一つ忘れてはならない」ものとして、本會の存在を挙げておられる。

先生は「この学会は、戦前は官幣大社明治神宮とは直接の関係はなかったが、『明治聖徳記念学会紀要』や各種学術出版物の刊行、講演会、研修会の開催等の学術・文化活動によって戦前の学問・文化に大きな貢献をした」とし、「紀要は内容が多岐にわたり、まさに「万古不易の真理研究」にふさはしく、学術・文化の進展を願はれた明治天皇の御聖徳を記念するにふさはしい内容」であったことを評価されている。また、単行学術書の出版事業（『校本古訓古語拾遺』、袋中著『琉球神道記』、設立二十五周年記念論集『日本文化史論纂』、『明治天皇聖徳余光』など）に触れ、なかでも『神道書籍目録』（昭和十三年）の続編である『明治・大正・昭和神道書籍目録』が、昭和二十八年、明治神宮社務所から刊行されていることに注目され、それが「明治天皇のご聖徳を宣揚する明治神宮として最適の事業であった」ことを評価されているのである（『神社新報』平成二年八月二十七日号）。



阪本是丸先生（神社新報社提供）

この小論が書かれた平成二年は、先生が評議員・編集委員として、本會の運営に本格的に関与するようになった年であった。殊更本會の存在に言及されているところに、本會に対する先生の「決意」のようなものを感じさせる。先生も小論で引用している、「財團法人明治聖德記念學會寄附行爲（會則）」（大正九年三月）第一条「本會は明治の聖代を永遠に記念するに萬古不易の眞理研究を以てせむとして起れる日本學會」こそ、運営にあたって先生がめざされたところであり、戦前の本會を牽引された加藤玄智博士は、先生にとって「ロールモデル」ではなかったろうか。

先生は、本會の直接の前身である加藤玄智博士記念學會の頃から関わっておられ、「明治初年の神社改正問題――大

小神社取調と神宮御改革――」（『神道研究紀要』第七輯、昭和六十年五月、のち『国家神道形成過程の研究』〔岩波書店、平成六年〕所収）を発表されているが、運営には再発足直後の平成元年十月より関与された。本會における先生の活動は、およそ次の三期に分けることができよう。

第一期は〈評議員時代〉（平成元年十月～平成十三年十月）である。昭和六十三年、本會が再発足するにあたり、発展拡大していくため、神社関係者だけでなく、幅広い分野から役員を選出し、更に新進気鋭の学者を評議員に委嘱することになった。先生は大原康男・岡田莊司・白山芳太郎の各先生とともに、評議員としてお名前を連ねている。また平成二年十月より、常務理事の上田賢治先生采配の下、編集委員の一人として、紀要の編集を中心とする本會事業の企画・立案を進められた（ただし編集委員は、平成七年六月、「一身上の都合」により一度退任された。後任は中西正幸先生）。

第二期は〈常務理事時代〉（平成十三年十月～平成二十三年十月）である。平成十三年、先生は上田賢治先生の後任として理事に選任の上、常務理事に就任し、本會運営の面で中心的な役割を果たされることになった。

同年は本會の運営上、画期となる年であり、本會役員組織の充実を図り、かつ将来的発展を期するため、新たに理事長職が置かれた。第一代理事長には当時、國學院大學学長であった阿部美哉先生が就任された。また従来の編集委員会も、「企画・編集委員会」と名称を変更し、委員も大幅に増員した。常務理事となった先生も、委員の一人として復帰され、初めて紀要に「特集」が組まれるなど（復刊第三十七号「儀礼文化の現在」）、現在に繋がる本會の体制が整備されたのは、平成十三年から十五年にかけての時期であったと言えよう。その矢先、平成十五年十二月、阿部先生は学長在任のままご逝去。翌年十月、当時、國學院大學学長であった安蘇谷正彦先生が、第二代理事長に就任され、先生は引き続き常務理事として、本會を牽引された。

紀要の内容が刷新され、毎号「特集」を組み、従来の論文・講演録・翻刻のほか、研究ノートや随想、書評、図書紹介などを掲載し、年一回の発行になったのは、平成十七年の復刊第四十三号からである。復刊第四十三号の「特集」は、「近現代の神道・日本文化」であったが、今日までに明治期を中心として、古代から現代まで、さらには、宗教学・民俗学などの隣接諸科学までも包摂する幅広い内容を有するものとなった。

平成十四年の段階で構想されていたシンポジウムは、平成十八年、先生がセンター長を務めていた國學院大學研究開発推進センターとの共催により、従来の「公開学術講演会」に代わって開催されることになった。また戦前の本會

がそうであったように、学術出版物の刊行にも乗り出し、平成七年より十一年間にわたって紀要に翻刻されてきた「三条教則関係資料」をまとめ、平成十九年、『三条教則衍義書資料集』全二巻（三宅守常先生編）が刊行された。

紀要を毎回「特集号」とすること、シンポジウムを開催することは、先生の提案だったようである。紀要の特集と有機的に関連して、シンポジウムと年二回の例会が開催されるという体制であり、学術出版物の刊行も含め、戦前の活動を念頭に置かれて、着実に進められた結果であろう。

第三期は〈理事長時代〉（平成二十三年十月～逝去）。平成二十三年十月、先生は安蘇谷正彦先生の後任として、第三代理事長に就任された。理事長に就任されたからといって、先生の役割に変化があったわけではない。基本的に〈常務理事時代〉に整備された体制を維持しつつ、本會を牽引していかれた。ただ本會のことは、自分がすべて責任を持つとの覚悟で、運営に当たられたように拝察する。

この間、本會を取り巻く環境は急激に変化した。このことを誰よりも把握されていた先生は、大所高所から物事を判断された。これからも長く本會の活動を続けていくためには、本會自体の現状と、本會を取り巻いている環境の両方を見据えて、運営を見直していくことの必要性を、力説されていたのである。

先生は、國學院大學研究開発推進センター長、國學院大學副学長、神社新報社論説主幹など、大学・神社界のさまざまな役職に就かれて多忙をきわめておられたが、その合間を縫って、時には國學院大學の研究室で、時にはご自宅で、紀要の編集や運営上のさまざまなことに、親身に相談に乗って頂いたことは幸いであった。

このように先生は、再発足直後からご逝去まで、本會の運営に関与され、一時期を除いて、本會事業の企画・立案に一貫して関わっておられたが、運営にあたっては裏方に徹された面もあり、実際、どれを先生の功績とするかは難しい。しかし先生は、厳然とした存在感・影響力を発揮しており、とりわけ〈理事長時代〉には、先生の一存で決定したことも少なくなかった。

先生が本會に関与された三十数年間は、再発足以後の本會の歴史と言っても過言ではないであろう。長年にわたり本會の発展に尽力された先生のご厚恩に感謝し、哀悼の意を表するとともに、先生がめざされていたであろう「明治の聖代を永遠に記念するに萬古不易の眞理研究を以てせむとして起れる日本學會」であることを、これからもめざし、努力していきたい。

（文責・戸浪裕之）

阪本是丸先生 本會関係業績

◆本會役職

平成元年十月　本會評議員
平成二年十月　兼本會編集委員（～平成七年六月）
平成十三年十月　本會常務理事（兼企画・編集委員）
平成二十三年十月　本會理事長（兼企画・編集委員）

◆論文・講演録等

【論文】「明治初年の神社改正問題――大小神社取調と神宮御改革――」（加藤玄智博士記念学会誌『神道研究紀要』第七輯、昭和六十年五月）
【論文】「近世の新嘗祭とその転換」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四号、平成三年七月）
【講演録】「神仏分離・廃仏毀釈の背景について」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十一号、平成十七年六月）※平成十七年三月十二日、於明治神宮社務所講堂
【あとがき】「神道・日本文化研究の新しい地平へ」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十三号、平成十七年十一月）
【講演録】「日本人の霊魂観と慰霊」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十四号、平成十八年十一月）※シンポジウム「日本人の霊魂観と慰霊」（平成十八年十月二十八日、於明治神宮参集殿）討議司会
【講演録】「近代の法制度と神道文化」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十六号、平成二十一年十一月）※シンポジウム「日本の法制度と神道文化」（平成二十一年六月二十日、於國學院大學常磐松ホール）基調講演Ⅱ
【巻頭言】「教育勅語の御渙発百二十年を記念して」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十七号、平成二十二年十一月）
【あとがき】「「神社の造営と祭祀」・「昭憲皇太后崩御百年」」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十号、平成二十五年十一月）
【講演録】「大正・昭和前期の神道と社会」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十一号、平成二十六年十一月）※シンポジウム「大正・昭和前期の神道と社会」（平成二十六年七月十九日、於國學院大學常磐松ホール）討議司会
【あとがき】「特集「大正・昭和前期の神道と社会」に寄せて」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十一号、平成二十六年十一月）
【講演録】「平田国学の幕末維新」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十五号、平成三十年十一月）※シンポジウム「平田国学の幕末維新」（平成三十年七月十四日、於明治神宮参集殿）コメント

◆講演（紀要に活字化されたものは除く）

講演「岩倉具視と近代日本」（平成十年九月二十六日、於明治神宮文化館）